
アホリズムの世界に転生しました

馬糞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アホリズムの世界に転生しました

【Nコード】

N6949S

【作者名】

馬糞

【あらすじ】

アホリズムの世界に転生して主人公がとりあえず死なないように頑張る話です

転生したらしいです（前書き）

既に5作抱えているんですが二つもうすぐ終わりそうな感じなので
投稿しました

まあとりあえず2ヶ月以上は空けない！それが目標

それじゃどーぞ

転生したらしいです

俺は死んだ・・・らしい

気が付いたら白い部屋に居た

部屋と言うには広い・・・訂正、白い空間に居た

まあそこで神に能力とかを貰って転生させて貰うことになった

能力は戯言の曲弦系と一喰い、暴飲暴食とかの技能と哀川さんの技能と能力

行く世界は・・・どうしようか・・・

そんな事を考えていると神が箱を一つ持ってきた

「くじびきで決めると・・・？」

「そう」

マジか・・・

とりあえず一枚引く

『アホリズム』

死ぬわ

いや、櫛鹿に行かなければいい話か

そんな訳で俺は暗い穴に落ちる

で、何これ？

なぜか赤ん坊からスタート

両親は国のお偉いさんらしい

そして俺は中学を卒業しなぜか櫛鹿に入学する事になった

ありとあらゆる情報を調べさせられ生き残れるだけの訓練やらなにやら

まあ人類最強の力があれば十分に問題ないレベルだったけど・・・

そんなこんなで明日は入学式

よし、文字は嘘にしよう

あれ、球磨川みたいに大嘘憑きが使えるようになったらいいなあ的な意味で

いや、止めた

ただの嘘つき野郎なだけになったら困る

そんなこんなで考えてる内に朝になってしまった

「ハア・・・」

バッグに入っているもの、教科書の他に銃、マッチ、水、小さい扇風機（なぜこれを入れた？）、それとIpad

Ipadは神に貰った物である

夜中にいきなり俺の部屋にきやがった

あのチビ神

『何か言った？留音くん』

この声は・・・

「神・・・」

『そのとおり』

ちなみに留音と言うのは俺の名前である

ちなみにフルネームは響 留音と言う

「変な学校・・・」

まあ分かってたけどね？なんかさ、第一印象が学校と言うより中国の建造物だもの

呆れるよこれは・・・センスを疑うね

まあ俺のセンスもあれだけど・・・

『では、最後に理事長の挨拶を・・・』

入学式が進んでいく

俺はと言えば

「・・・zzzz」

寝ていた

調べるべき事は全て調べた筈だった・・・

なのにどうしてこんな事に・・・

「えー、つなし・・・貞九郎です。オイラが5組の担任です」

俺のクラスは5組

一年5組と言っているがぶっちゃけここは一年で終わりの学校なので学年なんて意味は無い

「えー、皆さんに残念なお知らせがあります」

こいつ、担任、十貞九郎はとんでもない事を言い放つ

「実はオイラの受け持つクラスは毎年必ず、全滅するんです」

「「「「「!?」「」「」

クラス全員の顔が驚愕と言うか戸惑いと言うか変な顔になる

「昨年も一昨年も、その前もなんですが、オイラの生徒は次々と命を落として行き、気が付くと教室には誰も居なくなっているんです。大体3週間〜一ヶ月、一昨年は10日で全滅と言う新記録まで作っていました」

この時、俺が選ばうと思う文字が決まった

『無』

ありとあらゆる事を無かった事に出来たらいいなと思った

まあつまり大嘘憑きなんだけどさ

「ですから、「十先生」

十が最後まで言う前に1人の50程の男性が入ってきた

恐らく教師の1人

「・・・はい、そうですか・・・分かりました」

何か話している

「えー・・・みなさん。さらに残念なお知らせです」

この後、俺たち5組の生徒を地獄へ憑き落とす言葉を言い放つ

「ここに来る途中5名の生徒が事故で命を落としたそうです」

1人はタンクローリーの爆破に巻き込まれ1人は飛び降り自殺者と衝突、3名は湖で謎の水没事故を起こし亡くなっただけらしい

最初の1人はまだ分かる

2人目もまあ運が悪かったで済む

残り3人

なんだよ謎の水没事故ってッ!!

「みなさん、一刻も早く浮かばれるといいですね・・・まあ毎年の事ですけど」

去年は8名だったそうなの・・・

浮かばれるわけが無い

つか大丈夫かここ・・・？

なんかいろんな意味で

絶・・・・・・・・・・・・・・・・ツ対、生き残ろう

そう決めた

「でもね・・・オイラだって辛いんですよ。余りにも生存率が低い

ので昨年から給料を2割カットされたんです」

涙を流しながら十は言う

「オイラこれでも結構生活が厳しくて、どうしたらいいでしょうね。なんかいいアイディアないですか？」

まず教師をやメロ・・・話はそこからだ

「あ、そうでした。この紙を配らなくちゃいけませんね。皆さんはこれから戦うためにこの紙に一文書かなければいけないのですが・・・戦うというより、生き残れそんな文字が良いかも知れませんね！そうだそれがいい、そうしましょう！」

その後、各々が不安そうな顔をしながら戦う文字ではなく、生き残れそんな文字を書く

俺は『無』

死にたくないし

これならもし致命傷を負っても『無』かった事に出来るし、痛みも『無』かったことになるから痛くないし

おーけー、これで生き残れる・・・筈ッ！

痛ッ！なんで字が目に入るんだよッ！失明すんだろが！

あーなんか魔眼みたくなってる・・・

色変わってるし・・・オッドアイ？

どんな厨二病・・・

そうして太陽が空に浮かぶ島に隠され、蝕が始まった

転生したらしいです（後書き）

主人公を5組にしたのはそっちの方がオリキャラいっぱい出せて面白そうだから

原作組みとは関わる・・・と思う多分

それじゃまた次回～

はじめてのしよく(前書き)

2 話目です

それじゃどーぞ

はじめてのしょく

「ホッ、ハッ、よっと」

迫ってくる化物の攻撃を避けながら校舎内を走る

俺の無の字、あれなぜか目に付いた

なんで魔眼かつての

着地した途端足元から巨大な口が出てくる

閉じる寸前に曲弦系で上あごを挟る

血が飛び散り制服が染まる

「汚れ落とすの大変だろうな・・・」

周りには死体、肢体、死体、シタイ

腕が落ちてたり、頭が落ちてたり、血なまぐさい光景

とりあえず俺は恐怖やらを一旦無かった事にして足が竦まないようにする

「イヤア！来ないでえ！！」

廊下を走っていると化物3体に襲われている女生徒を見つけた

とりあえず銃で怪物の頭を撃ちぬく

2対は頭から脳髓を撒き散らし倒れた

もう一体は当たった場所が頭では無く腕だった為倒し損ねた

化物の注意がこちらへ向く

が、襲ってくる前にずたずたになって死んだ

「あ・・・」

フラアッと女生徒が気絶する

これってどうするべき？

「とりあえず怪我は無さそうだ」

蝕もそろそろ終わるだろう

カウントダウン

3・・・・・・2・・・・・・1・・・・・・0

太陽の光が見えそれと同時に化物たちがゆがんで小さくなり消えて行く

ついでに校舎にあったヒビやら穴やらの傷が無くなって行き、最後には血と肉片だけが残った

「とりあえず生き残りましたかねえー」

呑気に呟く

女生徒の横に生徒手帳が落ちていた

多分この子のものだろう

どうやら一組の生徒のようだ

主人公組が何組かは忘れたけどまあそのうち関わるかどうか決める
として

とりあえず運んでやる事にする

保健室

最初は教室に運ぼうかと思ったが気絶しているので保健室に運ぶ

が、中には大量の怪我人が居てとても無傷の女の子を入れられる余裕は無かった

「怪我人？」

保健の先生が聞いてくる

「いえ、助けたら気絶しちゃったんで寝かせるところと思ったんですけどスペース無さそうですね。この子の部屋がどこか分かったら教えて欲しいんですけど」

「えーっと・・・お名前は？」

なんだっけ

生徒手帳に書いてあったな・・・えーっと・・・思い出した

「須能原すのはらねいろう音色ねいろだっと思います」

「女の子みたいな名前ね」

あれ？もしかして俺に聞いてたの？

「あ、今言った名前はこの子の名前です。俺の名前は響留音です」

「女の子みたいな名前ね」

同じ事言われたあ・・・

っーかよく考えたら女子寮って男子入っていいのか？

うーん

「うつ・・・ん」

考えていると後ろからうめき声

どうやら起きたようだ

「大丈夫か？」

「は？へ？」

最初は状況を理解して無かったようではかんとしていたが状況を理解すると段々顔を赤く染めた

「きゃあああああああ！！ってイタッ！！」

悲鳴にびっくりして落としてしまった

その後辺りを見回して顔色を悪くする

「とりあえずここから出た方がいいだろ」

「は、はい」

手を差し伸べると青い顔をまた赤くして俺の手をとる

さっきの子を部屋に送った後俺は自分の教室に向かう

今更だけど一旦教室に戻った方がいい気がする

銃と糸以外の物は全部置いてきたから

教室に戻ると半分以上の生徒がいなくなっていた

これで全員が聞いてみたところ全員ではないがほとんどだそうだが

5割近くの生徒が死んだそうなの・・・

とりあえず荷物を持って寮に向かう

5組は大体の生徒が蝕の事を知っていたらしい

だがそれでもこの生存率

どうなってるんだろうね？

「はぁ・・・」

「どうした？暗い顔して」

「疲れたんだよ・・・途中からずっと人背負ってたんだからな？」

「人を助ける余裕なんてあったのかよ」

「即死じゃなければ死なないから」

「どんな文字にしたんだ？」

「無」

あ、ちなみに俺が今会話しているのは隣の席の山田^{モウ}君だ

ちなみに文字は逃

生き残れる文字と聞いてとりあえず逃げられるようにと

「無か・・・よく思いついたなそんなの」

「ジャンプは毎週購読してるぜ！」

この世界にもめだかボックスとジャンプはあった

普通に球磨川とか居た

「實際漫画の知識って役立つよ？例えば一方通行みたいな能力が使いたいなら向とか。御坂なら電とか雷とか」

「なるほど・・・お前は嘘憑きの能力を使ってるわけだ」

「俺のボケはスルーですか」

なんで禁書限定？って言うツツコミが欲しかったんだ

そんな訳で山田君と話した後は寮へ向かおうと思ったが既に昼飯の時間帯だったので食堂に向かう事にした

食堂、少し離れた位置に見覚えのある顔を見つけた

あれは・・・

「オイツス日向」

「えーっと・・・あッ！お前、留音か！？」

「そうそう」

日向三十郎

小学校が同じだった

ついでに日向は姉が、俺は両親が政府の関係者なのでそっちの方で
も多少接点があった

あだ名は・・・

「ミソ！」

「ミソ言っとなっ！！」

「し、知り合い？」

日向の前の席に居た男の子が聞いてくる

小さいけど・・・

「高校生？」

あ、落ち込んだ

「ごめんごめん。ちっさいからつい・・・俺は5組の響留音」

「僕は1組の六道黄葉。こっちは・・・」

「比良坂アイラ」

それぞれ自己紹介

「座って良い？」

「どうぞ」

席に座りさつき取ってきた料理を食べる

バイキング形式って・・・あ、これうまい

「・・・よくこんな時に食べられるよね・・・？」

「ここの料理うまいからな・・・それにこんな時だからこそ食っておかないと後でぶっ倒れて死ぬぞ？」

それに結構普通に食べてる人もいるし

「1口でも食わなきゃ体力持たないってこんな学校じゃ」

「それでもそれは・・・食べすぎでしょ」

六道の言葉に2人はうんうんと頷く

そんなに食べてるかねえ

ちなみに俺が取ってきたのはスパゲティとなぜかあったキャビアとフォアグラにオムレツビーフシチューステーキからあげ炒飯麻婆豆

腐ケーキサラダ菓子パントリュフ大トロ中トロ赤身頭肉カマ下ラザニアetc・・・

「いやいや、十分多いでしょ・・・どうしたらそんなに食べられるの」

「体力使ったら」

「答えになってねーよ」

そんなこんなで最初は食べて居なかった比良坂も無理やり1口食べた後もう1口と行くうちに完食した

ここの料理うまいから・・・食べるだけ食っておかないと明日死んだら二度と食えん

いや1口食ってびっくりしちゃったよ・・・

何人かは最後の晚餐とかふざけたこと言ってるけどね

まあそう思うのも仕方ないか

はじめてのしよく（後書き）

主人公組と接触

しばらく出番はありません（笑）

それじゃまた次回！

恒例行事（前書き）

3話目です。連続更新です

やっふっふっふっ

それじゃどーぞ

恒例行事

ルームメイトは隣の山田だった

どうやらモブじゃ無いらしいのでフルネーム公開

やまだりんと
山田隣人

名前まで隣の人だからな？こいつ

逆に覚えづらいわ

「5組の生存率低すぎるよな・・・」

「確かに」

俺と山田はモンハンをプレイしながら言う

「山田アアアアアアア！何死んでんだアアアアアアアア！」

山田がレウスの炎に向かってダイブした

そのままピチューン

猫に運ばれて行った

これで2死

「あと一回しかねーな・・・」

「倒せるかこのレウス」

「やっぱG級銀レウスに装備無しアイテム無しで挑もうってのは無理があつたか・・・」

口調が似てるため分かりづらいつと思うので上から俺、山田、俺だ

そんな感じでモンハンをやっていると別の部屋からガラスを割る音が聞こえた

これで23回目

「元気だねえ、何かいい事でもあつたのかい？」

「俺に聞いてどうする」

ツッコめよ俺の台詞

「さすがに知らなかったか？」

「いや知ってるよ、化物語だろ？」

知ってんのかよ

ならツッコめよ

「いい事なんて何も無いだろうよそもそも」

「少しでも自殺者が減る事を祈りたいですねえ」

「あ、死んだ・・・」

クエスト失敗

ゲームオーバー

あーあ・・・さすがに装備無しアイテム無しはきつかったか・・・

「これって一種の教訓だね」

「は？」

山田が訳が分からないと言っ顔をする

「何事も準備は必要って意味さ」

そう言っ俺はバッグから銃と糸を取り出す

銃は二丁ある

「一丁持っとく？」

「ああ」

どっちも同じ銃

M19コンバットマグナム

弾数制限を『無』くしているので何発でも撃てる

「何でもアリだなそれ」

「『逃』も逃げる目的なら安全な場所に一瞬で移動出来るんだろ？
それも結構便利だと思うけども」

「まあな」

髪を前で払う仕草でかつこつける山田

「気持ち悪い」

「ヒドッ！」

で、翌朝

教室はガランとしていた

どうやら昨日いきなり荷物が倒れそれが運悪く頭にぶつかり死んだ
奴が2人出たらしい

いくらなんでもおかしいだろうに・・・

「六道が昨日こんなところだとは思わなかったとか言ってたけど・・・それは俺が言いたいね」

こんなクラスに入る事になるとは思いもしなかった

教師の情報はまったく無かったからなあ・・・

「親父に言つといた方がいいんかねえ」

「響、今日も蝕ありそうだぞ・・・」

マジか・・・

そつなつたら全滅もありえるな・・・

少なくとも人数は一桁突入すると思う

高確率で

入学して一週間も経ってないのに・・・

あ、ちなみに他のクラスに1人居た自殺者、ここには1人も居ない

事故死なら居るけど・・・

「ハア・・・」

「ハア・・・」

俺と山田が同時にため息をつく

「てるてる坊主見てくる・・・」

「なぜに？」

「和むッ！」

山田は強い口調でそう答えた

和むものが好きらしい

照る照る坊主とかかわいいじゃん？とか言ってた

冗談と言っていたが実は恒例行事の照る照る坊主見たさにここに入
ったと言う

今思うとアレは冗談じゃなかったのかもしれない

つーかまだ照る照る坊主飾って無いんじゃないかね？

誰も雨降ったら中止なんて知らないだろうし

数分後

見れなかったと落ち込みながら帰ってくる山田の姿があった

恒例行事（後書き）

とりあえず次回主人公とオリキャラ紹介を載せようと思います

ネタバレアリなので注意

キャラクター紹介（前書き）

ネタバレアリです

キャラクター紹介

響 留音

年齢：15歳

血液型：B

髪の色：茶色

目の色：黒と左目は緑に無の字

身長：172cm

体重：60kg

クラス：5組

能力：無『ありとあらゆる事柄を無かったことにする大嘘憑きの劣化版』、曲弦糸、一食い、人類最強

説明

転生者

ガンガンオンラインは毎週購読していたがコミックスは持っていなかった為原作知識は余り無い

アホリズムの世界にはくじで行く事になった

基本マイペースで面倒な事はやらない

楢鹿に関してはちゃんと調べてきたのに5組の担任、十はとんでもない奴だった

クラスの間がドンドン減っていく事に対し俺もいつか死ぬのかねえとか呑気に考えている

日向、ユーリは小学校の時の同級生

大食いでかなり食べる

自分の面積より大きくても完食出来る

一日5食（朝食、昼食、間食、夕食、夜食）食う事もある

にも拘らず太らない

栄養は何処に消えたのだろうか

能力は即死じゃなければどうにかなる

死んでる人間には効果が無いが生きていればどんな状態でも元に戻せる

山田

血液型：A B

髪の色：黒

目の色：黒

身長：1 6 8 ?

体重：5 2 k g

クラス：5 組

能力：逃『一瞬で安全地帯まで逃げられる』

説明

主人公の友人

隣の席でルームメイト

モブキャラと思ったらレギュラーになった

基本主人公とつるんでる

政府に知り合いがいる

キャラクター紹介（後書き）

こんな感じで行くと思う

龍（前書き）

4 話目です

それじゃどーぞ

龍

教室に來ると今日は誰も死んでいなかった

いやー良かった良かった

「良くねーよ」

「なぜに？」

山田の良くない発言に俺は疑問を持つ

「今の生徒数が105人なんだよ・・・しかも晴れてるし」

「マジか・・・」

105人、3の倍数

しかも晴れている

その上島の軌道は太陽にかぶさりそうになっている

「隔離型か・・・」

「そう」

隔離型じゃ死ななくても閉じ込められる可能性が高いからどんなに強い能力だろうが余り意味ないんだよな・・・

あ、そろそろ来る

とりあえずこれだけ言ってみようと思う

バルス

直後、島が太陽を隠し蝕が始まった

島は強い光を放ちしばらくすると俺は見知らぬ森のような場所に倒れていた

「さて、メンバー探しと行きますか・・・」

糸は・・・あつた

ポケットに入れっぱなし

銃もある

おーけー準備に問題は無い

後はメンバーを探せばいい

俺は銃を上に向け撃つ

弾は信号弾

この銃って色々改造してあるから何でも撃てるぜ

銃声が鳴り響き空に煙が上がる

「さーて、誰が来るかな」

2〜3分後

やってきたのは山田と・・・えーつと確か・・・

「思い出した。須能原だ」

「なんで私の名前知ってるんですか!？」

「生徒手帳が落ちてた」

この間助けた奴だった

「とりあえず進もうや」

「だね」

「ああ」

上では変なスロットのようなものがカシャカシャと動いていた

タイマーのようだ

アレが0になるとゲームオーバーだったっけ

あの字じゃ読めんけど

「ちなみに須能原は文字何？」

「創、これなら何でも創れるから」

「おお」

サイレンサーとか創って貰おうか・・・

そんな事を考えていると龍が張り付いた妙な形をした門にたどり着いた

『我は『龍』・・・汝らに試練を与えるものなり』

「門が喋った・・・」

「試練って何？」

「さあ？」

『ここより無事下界へ出たくば我が試練を受けよ』

「須能原、槍とか創れない？」

「あ、創れるよ」

須能原は文字を使い槍を一本創る

『この扉の鍵は我が体内にあり それを見ん事手中に収めてみせよ
方法は二つ 一つは『技』を用いて我に挑む法・・・もう一つは
『力』を用いて我に挑む法・・・技か 力か・・・汝らが選択し
我を打破せよ』

「えーつと鍵は何処にあるのかね」

「そんなの聞かれても分かりませんよ」

「とりあえず適当な場所を突けばいいんじゃないかね？」

いやそれでいいのか？

『天には制限を示せり 『零』が揃いし時 蝕は終え 汝らも滅す
るだろう それまでに我を打破せよ』

「まあ即死じゃなければどうにでもなるから安心しろよな！」

俺は親指を立てて見せる

「安心出来るかッ！」

「あの、早くしないと不味いんじゃない・・・」

そうだな

なんか龍が殺し合い生き残ったものがここから出れるとか言ってるけど無視

「せいッ！」

頭の近くを槍で思いつきり突く

すると龍は扉から剥がれ襲い掛かってきた

「ハズレ」

「言ってる場合か……」

俺は懷から銃を取り出す

山田も同じように取り出し須能原も銃を創る

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ツ！」

「何処の吸血鬼（？）だお前は」

[W R Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y]

馬鹿な事をやりながら弾数制限の無い銃を乱射する

龍が下手な動きをしないよう曲弦系で木に縫いつけながら

「アベシッ！」

龍の振るった尻尾が山田の顔面に当たり山田が吹っ飛んだ

「山田アアアアアアアアアアアアアア」

「山田さん!？」

銃を乱射しながら俺は山田の名前を叫ぶ

まあ生きてるだろ

あいつしぶといし

糸を思いつきり引くと龍の体が8等分に切り裂かれた

チャリーンと言う音がしてそっちを見ると鍵が落ちている

「ゲッツ」

その後山田を担ぎ怪我をなかった事にして扉を開く

俺たちは12番目だった

「オイっす」

出てすぐの所に日向がと美濃と篠原が居た

「・・・そいつ大丈夫か？」

俺が担いでる山田を指差して日向が問う

「大丈夫だ。田中は丈夫（？）だから」

「山田だッ！！」

あ、起きた

「さて、5組は何人生き残ってくれるか・・・」

「何言ってるんだ？」

「5組の死亡率は毎回ヤバいんだよ・・・」

蝕が始まる前から5人逝ってたからな？

「どんなクラスだそれ・・・」

「今回の蝕で恐らく1桁台まで減ると予想されている」

「不吉な事言ってるじゃねー」

山田のツッコミが入る

程なくして比良坂と見知らぬ双子が出てきた

「六道はまだ来てないわけ？」

「ああ」

おいおい大丈夫か？既にいくつかの扉は黒くなって開かずの扉に変わってんですけど

数分後、開かずの扉になった扉が蹴り開けられ中から不良っぽい男を担いだ黒髪の男が出てきた

誰だ？

「開かずの扉って出れないんじゃないかなかったっけ？」

呟いた直後扉が段々と消えて行つた

「六道君！！」

比良坂が黒髪の男の方へ駆け寄って行く

「アレが六道？別人じゃん。兄弟？」

兄貴の方？

「・・・・・・・・」

日向も啞然としている

比良坂と何か話した後、黒髪の男は消え六道に戻った

「アレだよ、本物の六道は」

「12人・・・か」

「何の事だ？」

俺の呟きに日向が首をかしげる

「5組の犠牲者」

「多ッ！！！」

うん、多いんだ

「十の呪と言われています」

「ええー・・・」

こんな感じで話す俺の前では先ほど六道（黒）が担いで持ってきた男の死体が袋に詰められている

職員が運ぼうとした直後、袋の中から血まみれの手が飛び出した

「あー！ー！ツー！ー！だからちゃんと生きてんじゃねえかよオレはよおツー！！なんつべん袋に詰め込んだら気が済むんだあああああああああああッ！！！」

・・・あー、こいつ蘇か

俺も思いついたけどもうちょい使い勝手のいいやつ欲しかったから止めたんだよな

名前は袴田と言っらしい

そんなこんなで、六道は死ぬのが怖いと言っていた袴田と勝手に共感を覚え

俺と日向は利用価値を見定めていた

「日向です」

「響です」

「「よろしくね」「」

本日の5組 死亡者数12名

既に壊滅寸前

龍（後書き）

次回は宴じゃああああああああ

文字の話です

ちなみにこの小説の主人公及びその関係者は朝長なんて知った事じゃありません

その部分の原作知識は多少残って居ますが死にたく無いから非参加です

原作介入はあまりさせるつもりはありません

それじゃまた次回

宴（前書き）

遅くなりました

それじゃどうぞ

宴

今日も蝕があるらしい

「山田、今日は何人死ぬと思う？」

「2、3人？」

「ああ、ついに残り人数が・・・」

今、山田が2、3人つて言った時前の席の方に座ってる大高と竹林、それから高田の方から不吉な事言っなア！！という声が聞こえたが聞こえないフリ

というかもう残ってるの俺、山田、大高、竹林、高田の5人だけだからな？

壊滅寸前じゃねーか・・・

「そろそろクラス会議でも開くべきか・・・」

「「「クラス会議！？」」「」」

あ、食いついた

「ああ、つまりだな。昨日山田と話し合ってたんだ。そこで、とりあえずこれからは集まって行動した方が安全なんじゃ無いか的な事を話した訳」

「なるほど・・・でもそれって集中攻撃とかされたらまとめて死ぬじゃ・・・」

「最後に一人残って十の相手するのとどっちがマシ？」

「で事で、今後はとりあえず2〜3人のグループで行動することが義務付けられたのであった」

今日の蝕は宴という字だった

「日向、宴って何だ？」

蝕が始まった途端空からおっさんが落ちてきた

「いやおっさん以外にも色々居るけどとにかく共通してるのは全員酒豪っぽい」

皆酒飲みまくってる

それだけ

「どうするよ山田」

「いやどうするって言われても」

「とりあえず様子を見るべきじゃないか？」

上から俺、山田、大高

まあ確かに・・・

下手に近づいて顔面吹っ飛ばされても困る

哀川さんスペックと言ってもそれが何処まで大丈夫なのかは分からんし・・・

人類最強でも蝕には何処まで有効か分からない

多分『始』程度なら噛まれても千切れるとかは無いだろうけど・・・
4組の朝長とかに目を付けられて心臓を盗られたりしたら命は無いな・・・

しばらくすると1組のエコって奴が比良坂を連れて行った

それに釣られて数人の女子が行く

何処の世界でも女子は怖いもの知らずなのだろうか・・・

日向と六道が袴田を見る

そして袴田は宴に近づいて行った

で、色々あつて顔面吹っ飛ばされた

おっさん一人に蹴りを入れたためである

「・・・行くか！」

「そうだね！」

このマーク、単に怖いのを誤魔化すためである

で、酒を注いだり飲んだりしてるうちに蝕は終わ

今日の死亡者、0

「よかった・・・5組存続の危機にならなくて」

「不吉な事言っなくなって言っただろこの野郎・・・」

宴（後書き）

次回は水です

とりあえず原作よりは多く生き残らせたいと思います

それじゃまた次回！

水 1日目（前書き）

待望の水ツ！まあ待ってないけどね

そんな訳で更新です

それじゃどーぞ

水 1日目

空に波紋が広がってます・・・

ナニコレ？

「おい山田、何だアレは」

「知るかッ！俺に聞くなって言ってるだろうが！！」

怒った

「じゃあ大高、なんかシラネ？」

「知らん」

その後高田さんと武林にも聞いてみたところ「おい！なんでオレだけさんづけじゃねーんだよ！！」「ごほん

高田さんと武林さ・・・武林にも聞いてみたところ知らないという

そもそも武林はこんなところだとは知らずに来た奴らしく

蝕に関してはまったく知らないそうだ

「マジか・・・」

これもしき、水とかだったらヤバイよね

しばらくすると空から槍のような形をした生き物（？）が大量に降ってきた

教室の窓を突き破りこっちにも2〜3匹飛んでくる

「オイオイマジか・・・」

俺は懷から銃を取り出す

そして飛んでくる槍虫一（命名、俺）を撃ちまくる

銃声が鳴り響き虫の眼球のような部分がつぶれ吹き飛んでいく

どうやら銃は有効らしい

武林は『討』

手にメリケンサックが現れそれを使って槍虫を殴って倒していく

「うわーすげー・・・」

大高は『墨』なんで墨にしたんだろう・・・

所詮は墨汁である

と思ってたが予想以上に使える物らしく

筆が出たと思つたら墨汁が槍虫にかかり槍虫が落ちていく

高田さんは普通に『槍』だった

使いづらくね？とか思ってたけどそうでもなく

普通に飛んで来た虫を切ったり叩き落したりしている

山田は俺から貰った銃を撃ちつつ教室の安全地帯に瞬間移動している

「うお！」

余所見していると5匹の虫がこっちへ飛んできた

明らかにこの教室だけ数が多い

軽く20匹ぐらい居る

その中の数匹が俺目掛けて飛んでくる

やべ・・・死ぬかも・・・

もちろん都合よく助けなんて来るはずもなく

虫は俺の肩に刺さった

と、思ったら

「さ、さすがは哀川さんスペック・・・」

掴めた

間一髪、腋に挟んで押さえるという漫画みたいな芸当をやったのけ

る事が出来た

すっげーなオイ・・・

もしかすると腹とかに直撃しても5mmぐらいしか刺さらないとかありそうだ

とりあえず挟んだ虫を掴み振り回す

それで教室に居た槍虫のうち半分程が吹っ飛んで行った

目を回したらしい掴んだ槍虫を宙に放り投げ

暴飲暴食、両手を振りダブル平手打ち

虫は吹っ飛んで消えた

幸いその場面を見てた奴は一人も居なかったため助かった

「調子に乗りすぎた・・・次からは気を付けよう」

しばらく経つと蝕が終わり虫達も消えて行った

どうやら全員生き残ったようだ・・・

「良かった・・・今回は全員生き残れた・・・」

と、思ったら、俺の足元が突然爆発した

なんで？

もちろん特に怪我の類は無かった

なんでこんなオチにしたんだろう

水 1日目（後書き）

最近コレが転生物である事を忘れがちです

とりあえず主人公の能力の再確認って意味で今回の話を作りました

ちよつと無理があるかも知れない

暴飲暴食と哀川さんスペックの二つを目立たせたかったんですがぶつちやけそれをやりすぎたら確実に化物と呼ばれそうなので誰も見て居なかったと言う事にしたぜご都合主義

こんな話ですが見捨てないください

原作知識は皆無な主人公が頑張る話、次回は水 2日目、3日目です

3日目はどうか知りませんが2日目はやります

それじゃまた次回！

水 2日目（前書き）

久々の更新です

何時の間にかPVが10000突破してた・・・

ありがとうございます！

それじゃどーぞ

水 2日目

こんな学校でもH Rと授業はある訳で・・・

もちろんテストもあるらしいがそれはもう少し先である

5組のH Rは無駄に長い

でも出席は無駄に短い

というか全寮制って出席必要なのかどうか疑問なんだけどまあそこは気にしない方向で

既に5人となった教室は他のどのクラスよりもガラリとしていてそのうちこのクラス忘れられるんじゃないだろうかと思う事もある

そんな訳で長いH Rが始まった

「じゃあ、出席とるよー」

十が斜線でいっぱいの出席簿を見ながら生徒の名前を呼ぶ

「大高君」

「はい」

「高田さん」

「はい」

「武林さん」

「はい」

「響君」

「はい」

「山田君」

「はい」

「じゃ、ホームルームはじめます」

さっきも言ったがこいつのホームルームは長い

上にうざい

うざいとは言っていないかったが実際うざいのだから仕方が無い

つかこいつの話聞いてると殺意が沸く・・・

「今日は折り入って皆さんに見せたいものがあります」

おいで

と言ってバッグの中をあさる

出てきたのは

「オイラの愛猫、シジミちゃんです」

うわぁ・・・かわいくねえ・・・

泣き声野太い・・・

「オイラのシジミちゃんは美食家で、ブルゴーニュのトリュフしか食べないんです」

なんでそんな高級食材をチョイスするんだ？

魚の骨でも食わせとけ

せめてキャットフードにしろよ

トリュフなんて・・・まあ食った事あるけど

食堂に普通にあるけども・・・

「ところが昨日、今年も全滅したらオイラの給料が更に2割カットされることが決まりこの子の餌代が・・・」

zzz・・・

何時の間にかH Rは終わっていた

「今日も蝕来るのか？」

「来るんじゃない？島の軌道を見る限りじゃ」

多分2時間目の授業が終わった頃に来ると思う

そんな訳で・・・

キングクリムゾン！

はい、授業終了！

島と太陽が重なり蝕が始まる

空には前日と同じ・・・いや前日より大きな波紋が広がっていく

どうやらマジで『水』だったようだ

だれか火、持ってる奴居ないか・・・？

「マッチでどうにかなるかなあ・・・」

「いや無理だろ」

「ですよー」

空からは前回よりも多い数の銃

銃を取り出し撃ち抜く

外した分は素手で掴んで地面に叩きつけた

山田は何時の間にやら『逃^{エスケープ}』

飛んできた銃を銃で撃とうとしたらなんか銃が絡まった

そのままブランコのように揺られ俺の銃を弾き飛ばす

うつそーん・・・

銃が俺の肩を浅く斬った

無かったことにし校内に逃げ込む

大高と武林、高田も同じ事を考えたようで校内で合流した

「山田は！？」

「逃げたっばい。さすがは逃の能力者」

一瞬で逃げられるあの能力は中々重宝すると思う

軽く羨ましがっていると天井が砕け俺達のすぐ目の前に落下して来た

「「「「「.....」」」」」

「考えないようにしよう」

天井を迂回し教室に逃げ込む

そこには十がシジミと猫じゃらしで遊んでいた

ほほえましそうに・・・

いや本当に殺してやりたいわ

「おーいつ」

こっちに気づいたのか話かけてくる

「がんばれーっ！五組代表」

やかましい！

4人の心が1つになった瞬間だった

その後山田が能力で瞬間移動して来た

もちろん文字がここを安全地帯と判断した為だろうからいつでも使えると言っわけではない

「あとどのくらい凌げばいいんだよ」

「なあここ・・・割って入ったりしないのか？」

武林が窓をコンコンと叩きながら言う

すると

「あ、窓際気を付けて」

危ないから

言うのが遅かった

武林が立っていたところがピンポイントで碎ける

下で轟音になる

俺は武林の手を掴み引き上げた

「大丈夫か？」

「あ、ああ、ありがとう」

そんなやり取りを交わした途端、教室が爆発した

爆発は俺、武林、山田、高田、大高の全員を巻き込む

が

「はっ・・・はっ・・・い、生きてた・・・」

運良く下の階に飛ばされ俺達は全員生き残った

高田の腕が吹っ飛んで無くなっていたが無かった事にして教室に戻る

そこから聞こえてきた独り言

『来年はオイラ好みの子がたくさん残りますように・・・』

クロス

5人の心が（以下略

なんか名簿から俺達の名前が消されてるし

何時の間にか蝕は終わったのか外からの悲鳴や物音は聞こえなくな
った

立ち尽くしていると十が教室から出てくる

そして俺達に気づいたのか名前を呼びながら駆け寄ってきた

「すごいつ！生きてたのか！！すごいよ！！君たちは奇跡の子だ！
！おかげでシジミを捨てずに済みそうだよ」

餌をトリュフにしなければ良い話だろうが・・・

「さつきもさあ、無事でいますようにって祈ってたんだ。祈りが届

いたのかな!？」

お前の声全部聞こえてたんだよ!

その後俺達を褒めるような言葉を2、3言った後十は去って行った

俺達は改めて十の呪から逃れる事を心に誓った

水 2日目（後書き）

駄文だ・・・

さて、水に関しては次回で完結と思われます

それではまた次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6949s/>

アホリズムの世界に転生しました

2011年9月7日18時24分発行